

事例 62・デフォルメ版

タイトル： 私が妻を殴るのを止めてほしい

・ <事例の状況>

50歳代後半でアルツハイマー型認知症の妻を単身で介護しているAさん（60歳代前半）は、銀行を早期退職して以来7年間、介護生活を続けてきた。妻は若年発症の認知症が進行して現在の長谷川式スケールは3点。全ての生活を支えなければならない。Aさんはこれまでに糖尿病を持っていたが近所の「かかりつけ医」でコントロールしてきた。

ところがAさんは、ここ数カ月間に血糖値が上がり、ちょっとしたことでもいらいらするようになったため、その医師を通じて大きな病院を受診したところ、血管性認知症であることを告知された。そのことをきっかけに、絶望感と妻への思いが交錯して焦燥感が激しくなり、妻のちょっとしたミスにも激怒して殴ってしまうようになった。妻はデイサービスを週2回、クリニックの通所リハビリを週1回利用し、ホームヘルパーにも週3回来てもらっているが、誰もいない深夜に妻の行動・心理症状（BPSD）が出るとAさんは怒りを抑えることができず、何度も殴ってしまう。Aさん自身もそのことに悩んでいる。「自分の認知症が進めばもっと理性を失ってしまうのではないか」と心配になる。

・ <この事例で課題と感じている点>

介護を受けている妻も介護者であるAさんも、共に認知症になった。Aさんの感情が抑えきれなくなったとき、妻に暴力をふるってしまうAさんの行為をどのように抑え、二人のこころと生活を支援できるか。

・ <キーワード>

認知症の人同士の介護。 身体的虐待（不適切行為）。 夫婦の心身ケア。

・ <事例概要>

【年齢】 60歳代前半

【性別】 男性

【職歴】 Aさんは銀行員（介護のために早期退職）
妻は自営で洋品店を経営

【家族構成】 夫婦のみ 子どもはない。 唯一の親戚は妻の兄だが音信不通。

【認知機能】 Aさん HDS - R 18点
妻 HDS - R 3点

【要介護状態区分】 妻 要介護4

【認知症高齢者の日常生活自立度】 Aさん
妻

【既往歴】 Aさん 糖尿病・高血圧
妻には特筆すべきことなし

- 【現 病】 Aさん 血管性認知症
妻 アルツハイマー型認知症
- 【服 用 薬】 Aさん 服薬なし
妻 アリセプト
- 【コミュニケーション能力】 Aさんは感情が抑えきれなくなった場合を除き、ほぼ自分の意思を伝えられる
妻は自分の意思を伝えることがほぼ不可能
- 【性格・気質】 Aさんは思い悩む傾向あり
妻は明るく世話好き
- 【A D L】 Aさんは自立
妻には全面的なケアが必要（ほとんどを自宅で臥床して過ごす）
- 【障害老人自立度】 Aさん 自立
妻 C1
- 【生きがい・趣味】 Aさんの趣味は読書。現在の生きがいは「妻のえがお」。
妻は社交的で世話好き、映画が趣味。
- 【生 活 歴】 Aさんには家族がなく結婚して初めて家庭の雰囲気を知った。
妻は兄との同胞2人。学校卒業後にAさんと結婚して洋品店を経営していた。
- 【人間関係】 Aさんの「きまじめさ」と妻の社交性が対照的。
- 【本人の意向】「こんなこと（妻を殴ること）を繰り返している自分が情けない。」
「何とか自分の行為を抑えてほしい。」
- 【事例の発生場所】 自宅